武蔵野日曜聖書講筵　聖霊降臨節
聖霊の力
――使徒行伝第2章1～38節――

１９７７年５月29日
小池辰雄

魂で音を聞く　夜船閑話　原始力　根っこの世界　聖霊は愛の力　自己から自由になる　霊風
霊火　十字架の贖いを聞いて受けとったから聖霊が来た　十字架という門　無即無限無量　聖
霊のバプテスマを受けよ　祈り

【使徒1】

8 然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力（ちから）をうけん、而してエルサレム、
ユダヤ全国、サマリヤ、及び地の極にまで我が証人とならん』」

【使徒2】

1 五旬節の日となり、彼らみな一処（ひとところ）に集い居りしに、2 烈しき風の吹きき
たるごとき響き、にわかに天より起こりて、その坐する所の家に満ち、3 また火の如きもの舌のように現れ、分かれて各人（おのおの）のうえに止まる。4 彼らみな
聖霊に満たされ、御霊の宣（の）べしむるままに異邦の言（ことば）にて（ことごとく）語りはじむ。……

14 ここにペテロ十一の使徒とともに立ち、声を揚げ宣（の）べて言う『ユダヤの
人々および凡てエルサレムに住める者よ、汝等わが言に耳を傾けて、この事
を知れ、15 今は朝の九時なれば、汝らの思うごとく彼らは酔いたるに非ず、
16 これは預言者ヨエルによりて言われたる所なり。17「神いい給わく、末の世
に至りて、我が霊を凡ての人に注がん。汝らの子女（むすこむすめ）は預言し、汝らの若者
は幻影（まぼろし）を見、なんじらの老人は夢を見るべし。18 その世に至りて、わが僕・
婢女に、わが霊を注がん、彼らは預言すべし。……
37 人々これを聞きて心を刺され、ペテロと他の使徒たちに言う『兄弟たちよ、
我ら何をなすべきか』38 ペテロ答う『なんじら悔い改めて、おのおの罪の赦
しを得んためにイエス・キリストの名によりてバプテスマを受けよ、然らば
聖霊の賜物（たまもの）を受けん。

●魂で音を聞く

今日の集会は、正直、掛け替えのない大事な集会です。キリスト教の大きな集会は、クリスマス、復活節それからこの聖霊降臨節です。ユダヤにも三大節がありますが、キリスト

教にもこの三大節があるわけです。その中で実はこのペンテコステ、聖霊降臨節というのは一番我々にとって大事な――お祭ではありませんけれども――集会なんです。ところが、一般に聖霊降臨節というものをそう重んじない。それだけ現代のキリスト教が実はズレをきたしている。私は聖霊のことを強調したら、アウトサイダーにされた。ところが、使徒たちのインサイダーになった。私は地上の生涯が終るまで、その戦いをいたします。カトリックでもプロテスタントでもない。この使徒的信仰、キリスト直結。この本当の聖書の現実を身をもって証しなければいられないというわけです。

さきほど、使徒行伝の聖霊降臨のところを読んでいただきましたが、もうこれを聞くだけで、私は解説なんてことは嫌になってしまう。聖書は、目で読む本ではない。魂で音を聞く。音楽と同じです。生まの福音というものはみんな語られたものです。書かれたものではない。聖書は、しかたがない、残すために書いてありますけれども。我々が文字を読むときに、音を聞かなかったらダメなんです。読むのでなくて、聞く本です。それもただ耳で聞くのではない。魂で聞く。あなた方はこの集会でも、魂で聞いてくださらなければ。全存在で。意味を考えて、

「あれはどういう意味だ」

なんてことをやっているうちは、頭にズレてしまいますから、何回聞いても受けとれない。ところが、本当の聞き方をする人は一遍でその世界に入ってしまう。

私は昔、東京療養所に一か月に一度お話しに行きました。まだペニシリンのできていない時代で療養所といえば、もういつ死ぬかといった死ぬ公算の方がはるかに多い、非常に陰惨なところだった。だから、聞く人は、こちらが本ものなら、もう本当にしがみつくようにして聞いている。しばしば一遍で引っくり返った人が幾人もいました――。

「引っくり返る」

というのは本当の世界に入るということ。そうすると、

「どうして病気がよくなったか!?」

と医者が驚く。

●夜船閑話

あの白隠和尚というのが一遍、もう死ぬか生きるかという大病をした。いろんな薬をやってみたがダメだ。それで彼は禅の世界でこれに打ち勝った。そのことを書いた『夜船閑話』という本がある。それは結局、魂が本当の世界に入れば、これは身心一如であるから病に勝ってしまう。身心は分析のできないものです。気海丹田という。生命の大事な中心がある。眉間、心臓、下腹です。霊、心、体とパウロも言っている。そういう気海丹田が神に即する世界です――そこでは神と言わず、弥陀ですけれども――そうしたらば、もう自分の身体そのものが阿弥陀さんと同じだと。一つ力になる。

「弥陀何の法をか説く」
（我が此の気海丹田、総に是我が己身の弥陀、弥陀何の法をか説く）
と言って、法が化体するわけです。それで彼は打ち勝ってしまった。
今の医学なんてものが大体、肉体ばかりを研究し、それをやっているから、医術も医薬も行きつまってしまう。そういうことではない。人間は魂のある存在です。「病気」という言葉が表しているように、気が病んでいる。気が病むと身体が病む。そして、その気とは何かというと、
「聖霊の力」
と言いますが、これを広い言葉でいえば、気の世界です。
さっき私は心臓のことを言ったけれども、白隠は「心火」と言う。
「心火は大陽にして」
（心火は大陽にして上部に位し、腎水は大陰にして下部を占む）
と書いてある。まぁ日本の一流の霊的な人物というのは、やはり言うことがちがう。「心火は大陽にして」という。
「鼻から呼吸するのではないぞ、魂が呼吸せよ」
ということをはっきり言っている。もちろん我々の肉体は鼻から呼吸してますけれども。イザヤ書の中にも、
「鼻から息の出入りするものを恐がるな。霊気を与えるものをおそれよ」
とある。
「五臓六腑に七神あり」
（五臓に七神あり、脾腎各々二神を蔵す）
なんて言っている。どれくらい肉体をいわゆる肉体と思っていなかったか。キリストの霊体がまさにそれです。キリストのからだは、七神が宿っていたようなもの。白隠がやっと到達したところは、もうキリストは始めからそのような実存でおられた。
その焦点は、こつは何にあるかというと、やはり書いてあるね。
「神気をして丹田気海の間に凝らしむるにあり。」
（大凡生を養い長寿を保つの要、形を練るにしかず。形を練るの要、神気をして丹田気海の間に凝らしむるにあり。神凝る則は気聚る。）
と。神の気です。神の気を凝結、凝集せよと。気海丹田に神気を凝らしむにありと。大変、愉快な言葉です。まぁ白隠は、魂が相対的な判断を突き抜けた人です。
とにかく、相対界に我々はいますけれども、この相対界にいて、善だ悪だ何だかんだと、そういったいわゆる理性の判断の世界は大したことない。それをわるいとは言わないよ。わるいとは言わないけれども、それを本当に乗り越えた、相対界に在ってこの絶対界を相手にしてなければ。そのことがこの聖霊の世界なんです。聖霊の世界は絶対界を相手にし

ている世界です。絶対界を相手にしないようだったら、これはダメだ。本当に絶対界を相手にすると、もう相対界は自由自在ということになる。相対界をただ観念的に排除しているのではない。相対において即絶対をつかんでしまうような世界です。この散りゆくバラの花に、散らざるものを見ていかなくてはいかん。

「花はもうそのうちにしおれてしまうからはかない」

なんてな見方をしているうちはダメなんです。儚（はかな）きものの中に、儚からざるものを見ていくような目にならないと。

●原始力

マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの福音書は力ならざるはなしですよ。キリストの言葉も行為も全部これは聖霊の力です。

「キリストの言葉はどういう意味だ」

なんて言っているうちはダメなんです。

「わが言は霊なり、生命（いのち）なり、力なり」

という。パウロがコリント前書４章かどこかで、

「福音は言葉にあらず力にあり」

（神の国は言にあらず、能力にあればなり）

と言った。エネルゲイア。エネルギーの本当のエネルギーです。原子力という物理の世界もすごいけれども、我々のこの福音の世界の原始力はもっとすごい。

原始力です。結局、気力なんです。この気の世界です。野球の試合でも、気がついに勝利をもたらす。絶対にへこたれてはダメですよ、皆さん。運命環境が行き詰まったり、うまくならなくなればなるほど、失敗すればするほど、逆に力を出す。力が出てくるんです。私は不思議にそういうことになった。

私なんかは生まれつきの気の弱い泣き虫だった。中学校のときなんか、壇上に立たされると足が震える。小学校のときに唱歌の試験で一人びとり歌わせられると、足がガタガタ震えた。そういう弱虫なんです、元来。一体、先生になれるかなと思った、正直。ところがどっこい。まだ御霊の世界ではなかったけれども、とにかく信仰の世界に入ったら、何だかしらんけれども、力が、落ち着きが出てきた。あまり恐くなくなってきた。それが齢46歳、１９５０年のときにこの聖霊のバプテスマを受けたわけです。それから信仰の次元がちがってきた。

いわゆる確信ではない。もうしょうがないです、これは。キリスト主体の世界は。それに引っ張り回されている世界は。太陽に引っ張り回されている地球みたいなものだから。こっちにはひとつも責任がない。キリストが全責任をもって私を引っ張り回してくださるから、こんなありがたいことはないですか。罪びとだから、引っ張り回されながら軌道

からはずれたりいろいろする。けれども、必ず戻される。いよいよ先へ進めさせられる。詩篇23篇の中に、

「**恵みとまことが追いかけてくる**」

という言葉がある。

「**恵みとまこと**」

というのはキリストそのものです。恵みにしてまことなるキリストそのものが後から追いかけて、推進させてくださる。自分で力んで進む必要はない。推進力はうしろからやって来る。こっちはくたびれてぶっ倒れると、キリストは担いでくださる。そのうちにまた力を与えられて、また動きだす。こんな素晴らしい福音はほかにありはしない。

●根っこの世界

もう何もペンテコステのところを読まなくたって、福音書を読んだってどこを読んだっていい。これは聖霊が満ちているんだから。聖霊の一番の権化そのものがキリストですから。だから、毎日、あなた方は福音書を読みながら、聖霊降臨をしょっちゅうやってください。

「聖書を読んでいるうちに、もう力が来てしょうがありません。勉強なんてのはわけないです」

と。明日、試験がある学生がここにいる。けれども私は、

「集会に来なさい」

と言った。ここでもって原動力を受けとれば、もう時間は問題ではない。私は学生時代に翌日が試験でも、日曜日は勉強しなかった。月曜日の朝、２時か３時頃起きて勉強した。日曜日は聖書を読んでいればいい。勉強の原動力だから。

とにかく、今の青年が一番欠けているものはこの気の世界なんです。みんな頭はいいんだよな。頭が良すぎてしまって、もう意識過剰なくらいだ。ところが、気がダメだ。この気を与えるものは、本当の元気を与えるものはこのキリストの福音のほかにないんですから。

五旬節、ペンテコステの前に四十日間、復活のキリストは現れた。その四十日に限らない。パウロなんていうのはこの甦りのキリストにダマスコ途上で霊撃された。ぶっ倒された。これは正にキリストの霊的な、御霊の力が彼を撃った。もうパウロの回心くらいはっきりしたことはない。人間的な自分の熱心でいきり立っていたパウロは引っくり返されてしまったんだから。それでもう

「本当に俺はまちがえた」

と、彼はキリストに本当に降参しました。降参すると、本当に立ち上がれる。降参すると、本当にその世界に入るんです。毎回、私は言うけれども、

「聖書の現実に降参するまでは、いくら聖書の研究をしたって、何年やったってダ

メだよ」

と。文字通りはっきり読んで、そして、

「こんなもの凄いものにはとてもかないません。参りました」

と言って、その世界に自分を投げ入れてごらん。今度はその力が入ってくるから。こんな簡単なことはない。そのことを誰もはっきり言ってくれないんだ。

人間の文化文明、いろいろなものと福音とは比較にならない。福音がなければ、どんな良さそうなものも滅びていく。福音があれば、それが本当に活かされていく。根っこの世界だから。植物はまず根が生えて、それから芽が出てくる。だから、私は

「おめでとう」

と言わないで、

「おねでとう」

というと言った。まず、根が出なければダメだと。

●聖霊は愛の力

では、使徒行伝に入ります。キリストの十字架から、過越の祝いから数えて四十日、それからなお十日間、それが五旬節ということになる。この十日間は祈っていたわけです。

「お前たちはこの都で祈っていろ」

と。使徒行伝の最初のところに出てます。１章８節、

「8**然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力（ちから）をうけん、エネルギーを受けるぞと真っ先に書いてある。聖霊が来たら力が入るぞと。**

而してエルサレム、ユダヤ全国、サマリヤ、及び地の極にまで我が証人とならん』（使徒行伝1・8）

力が来なければ証人となれない。聖霊が来なければ、力ある聖霊がなければ、証人にはなれないと。

「聖霊を宿さざるものはキリスト者にあらず」

と、パウロがはっきりとローマ書８章で、ローマ書の中心で彼はそのことを叫んでいる。聖霊について論議はしますよ。けれども、聖霊の中からものを言う人が少ない。カール・バルトという現代の最大の神学者ですが、これが最後に――ブルンナーもそうですけれども――聖霊のことに気がいて、

「今まで聖霊をままっ子扱いにしていた。将来の神学はこの聖霊のことにもっと取り組まなければならない」

ということを告白している。あの「フラグメント」(断編)はなかなかいい。『ドグマティーク』（「教義学」）の第3巻。バルトが死ぬ間際に、ある人が彼の信仰を

「大変結構な信仰だ」

と言ったら、彼は、

「決してそんなことはない。私の信仰は決して善き信仰と言われるようなものではない」

と言った。『ドグマティーク』という素晴らしい驚くべき著作を彼はしたけれども、

「もし、私がこの大著作を肩に背負って天国に入ろうとしたら、天使が笑うだろう」

と、そういうことを彼は言っている。

「私はもう地上から去って、キリストにもしお目にかかるとするならば、『主よ、この哀れむべき罪びとを哀れんでください』と言うほかに私の言葉はない」

と言った。さすがにバルトさんです。大神学者も神学でもって天国に入ろうなんて思ってない。彼は、

「神さまは統べ治めたもう。たった一人をも神さまは放っておき給わない。皆が救われんことを自分は望む」

と、万人救済の言葉を電話で友人に語って、それでお終いだったそうです。バルトはそのように最後に――彼のやはり本質はただ神学者であったのではない。アウグスチヌスもそうですけれども――神に憐れみを乞うて、そして万人の救済を祈った。

今言ったバルトの気持はやはり、神の愛への本当の依り頼みです。この聖霊は力でありますけれども、この力はどういう力かというと、愛の力です。人を救いあげる、担いあげる力です。力はもちろんいろいろな表れ方をします。けれども、聖霊の一番本質的な力はこの愛の力。サタンとはもちろん戦う。キリストは、自己義認的なパリサイとは徹底的に戦われた。それは愛するが故の烈しい怒りなんです。愛する故にこその烈しい怒りである。そういう、御霊の世界はもはや絶言絶慮です。

●自己から自由になる

ダイスマンという人がパウロのことを書いている有名な本がある。これは若い人は是非一遍読むといい。多分、訳も出ていると思う。彼がパウロの本質のことを語っている言葉を引用します。

「パウロのキリスト教はしばしばキリスト論と同一なるがごとくに描きだされているが、けれども、パウロの宗教はそれよりもはるかに深く、はるかに真実な意味でのキリスト中心であって、キリストに関する教義などでは絶対にない。キリストとの交わりであり、キリストの中に生きることである。即ち、ほとんどすべての方面にあって存在して生き続けるところの、現在するところの霊的キリストの中に生き、キリストの中に住み、キリストに語り、キリストにおいてまたキリストを通して語っていたのである。パウロにとってキリストは現在の実在であり力である。エネルゲイアであって、その生命を与える力は日々にパウロの中に完成されていた。このエネルゲイアという

言葉がパウロの特色ある述語である。このことは極めて注意すべき事実である。パウロは偉大なるクリストフォロスであって、クリストロゴスではない。」

「クリストフォロス」というのは、キリストを担うもの、またキリストに担われているもの。だから、パウロは、

「われ汝のうちに、汝わがうちに。われ主のうちに、主わがうちに」

と、さんざんそういう言葉を使っている。離すことができないんです、パウロとキリストは。「僕（しもべ）」といって、本当にキリストの心に自分を絶対服従させている。絶対服従というのは、いやいや服従していることではない。従わざるを得ないんです。それが本当の自由だから。

「御霊は自由を与える」

とパウロが言いましたが、自由とはキリストから自由になることではない。自分から自由になることなんだ、自分から。みんな今の人は自由と言うと、自分が自由だと思っている。とんでもない話なんだ。大間違い。自分が自由ではない。それは自分というものに囚われている。自分から自由になっているのが本当の自由という。次元がちがうんです。それがキリストの奴隷となったとき。

マルチン・ルターの「奴隷意志論」というのはそのことを、パウロのその角度を彼は言ったんです。エラスムスが「自由意志論」を言ったが、それは相対的な現実ではエラスムスの自由意思論は真理です、いわゆる道徳哲学の世界なら。けれども、この宗教の世界になると、自由意志ではない。奴隷意志になる。

神さまの奴隷となっていたのが、エホバの僕となっていたのがキリストでありました。そうしたら、天衣無縫の自由でありました。絶対者に囚われているということは、何ものにも囚われないということ。自己にも囚われない。

いいですか。霊的に力を得ると、自分が偉くなったように、霊的に何か自分が自由になったようなのはダメだよ。御霊は私されるものではない。御霊が私たちを私し給う。御霊が私たちを持ち給う。

キリストは神の霊に囚われた人だから、その他の何ものにも囚われないから、本当に自由です。天衣無縫である。その言葉、その行為。嵐までも静まってしまう。キリストは。福音書のああいうところを読んで、あなた方はぶっ倒れないですか。本当にその世界に入ってごらんなさい。本当にぶっ倒れて、そして、直ちに波を鎮めたキリストの力が入って来ますよ。

私は貧弱な人間だけれども、

「私は疲れた」

ということを言わない。負け惜しみではない。それは眠くはなるよ。キリストの御力は私たちの中に本当に入ってくる、キリストのエネルギーが。福音書を読んで、電車の中でも

どこでも、本当に力を得てください。

福音書を読んで、キリストの言葉と行為にぶつかって、それに本当にぶっ倒されなければダメですよ、呑気な顔して読んでいたのでは。一頁なんか読めやしないですよ、二、三行でたくさんです。それはあるときは全部読んでいい。けれども今、私はその精神を、ここころを言っている。一日のうちのある瞬間において本当にキリストと取っ組んでください。祈りというのは、聖書を、キリストの福音を、パウロの手紙を、読むこと自身が祈りなんです。

「私は祈れません」

なんてことはありはしない。読むことが同時に聞くことなんです。本願の祈りが来ている。本願の祈りを祈らしめられる。そうしたらば、もう註解書なんて要らない。私は「註解」という言葉は嫌いだ。告白なんだ。

キリストの直弟子の、パウロ、ヨハネ、ペテロ、ヤコブ、なんと新約聖書というのは凄いエネルギーの本であったか。迫ってくるものであったかと。このことに本当に気がついてください。もうその一事でたくさんなんだ、今日は。それであとはもう、あなた方がそれを実践していただくだけ。実践です。お釈迦さんが、

「八万四千の法を説いたけれどもうひとつも説かなかった。お前たち自身がこれを体験するまでは」

と。だから、キリストは説明しなかった。

「聞く耳あるものは聞くべし」

と。不親切なんだよ、キリストというのは。

●霊風霊火

使徒行伝に戻ります。２章1節、

[1]**五旬節の日となり、彼らみな一処（ひとところ）に集い居りしに、**[2]**烈しき風の吹きき**
たるごとき響き、にわかに天より起こりて、その坐する所の家に満ち、

これはみんな集まっていたけれども、一人だっていい。一即多、多即一。このペンテコステのときは、多即一になっていた。大勢いたが、本当に一つになって祈っていた。心を一つにして。そうしたら聖霊が臨んできた。たった一人であってもいい。ダンテがそうです。

「一人一教会」

みたいな人物なんだ、ダンテというのは。「エクレシヤ」なんていうと、すぐ数を問題にするようになったら、そういうエクレシヤは本当のエクレシヤではない。預言者や使徒たちはみな一人で立ち上がった。

[2]烈しき風の吹ききたるごとき響き、にわかに天より起こりて、その坐する
所の家に満ち、

と。これは普通の風ではない。霊風です。霊風が巻き起こってきた。にわかに天より、霊界から臨んできた。その座するところの家に満ちた。ときにこういうことがある。

いつかのクリスマスがそうだった。天使がみんなの後に二人ずつ立ってしまった。大変なクリスマスでした。杖をついて来た人が杖が要らなくなってしまったり、肺病が治ってしまうし。

なにも身体が癒えることを言っているのではない。癒える現象の奥の世界を言っている。奥の世界は聖霊を受けとる。ただ一時的なこちらの力で作用したものはまたダメになりますよ、その人が本当に御霊を受けとっていかなければ。でなければ、いわゆる御利益教になる。パウロの福音の構造がいかに素晴らしいかを、パウロの書簡もときどきじっくり読みなさい。

3**また火の如きもの舌のように現れ、分かれて各人（おのおの）のうえに止まる。**

これも霊火です。霊的な火です。

いわゆる徴を求めたらダメですよ。徴はただ伴うときに伴うだけのはなしで、問題は徴の奥の世界です。徴の奥の世界を本当に受けとることが、本当の徴を受けとっていることになる。

「力あるわざ、徴、不思議」

なんていうことがよく書いてある。これは現実に現象するから仕方がない。

使徒行伝を本当に評価することが大事です。皆さんはぜひとも、自分の目で聞いてくださいよ。目で福音書を、聖書を、聖霊の響きを、目で聞きとるんです。読むのではない。魂で聞きとるんです。その角度がわかったらもういいです。

4**彼らみな聖霊に満たされ、**

これはもの凄いことだったんです。それはそうですよ。天界に行かれたばかりのキリストが天界からこれを送るんだから、もの凄いことに決まっている。二千年たっても、天界のキリストはいつでもやっていらっしゃる。

御霊の宣（の）べしむるままに異邦の言（ことば）にて語りはじむ。」（使徒2・1～4）

ああ、これは大変だ。みんな知らないんだ。そこに諸所方々から集まって来ているその方言を知らないペテロが、ヨハネが語るんです。そして、その方言によって福音を語っている。こんな現象は滅多に起きないけれども。これが聖霊がするわざなんです。だから、聖霊は驚くべき知恵でもある。知恵でもあるし、力でもある、愛でもある、光でもある、生命でもある。何でもある。キリストが我々に与えようとしているただ一つのものはこの聖霊である。それを抜きにして、キリスト教の歴史なんてものはあるかという。ところが、惨憺たる歴史だ。

そういうようにして、みんな引っくり返った。けれども、聖霊に感じたはよかったけれども、その先に本当にこれを受けとって、祈りを深めて受けとっていったかというと、必

ずしもそうではない。三千人いたけれども、それがどうなったか。そのあとが大事なんです。一時の感激や現象ではダメです。その感激、現象を通して常恒の、常に常燃の世界に入らないと。常念、常燃の世界に。

「御霊を消すな」

とパウロが言った。御霊の火を消すなと。また、御霊はこんこんとして流れる泉のごとし。霊泉、活泉である。水ともなり火ともなる。本当にそうですよ。あなた方、

「聖霊に燃える」

と言う。また、本当に聖霊の水に潤されて、

「聖霊滝の如く臨んでくる」

という。この話ならざる話をあなた方は聞きながら、だいぶその世界に入っていると思うけれども。

●十字架の贖いを聞いて受けとったから聖霊が来た

ところが、このもの凄い現象が起きたら、

「あれは酒に酔っているのか」

なんてそこに書いてある。

「そうではないよ」

とペテロが言っている。

15 **今は朝の九時なれば、汝らの思うごとく彼らは酔いたるに非ず、** 16 **これは預言者ヨエルによりて言われたる所なり。** 17 **「神いい給わく、末の世に至りて、我が霊を凡ての人に注がん。汝らの子女（むすこむすめ）は預言し、汝らの若者は幻影（まぼろし）を見、なんじらの老人は夢を見るべし。** 18 **その世に至りて、わが僕・婢女に、わが霊を注がん、彼らは預言すべし。**

と。ガラテヤ書3章1節、

「1 愚かなる哉、ガラテヤ人よ、十字架につけられ給いしままなるイエス・キリスト、汝らの眼前に顕されたるに、誰が汝らを誑（たぶら）かししぞ。

いいですか。パウロの聖霊の土台は十字架にありました。十字架といえば、どこの教会でも十字架が立っていたり、女の人が首に十字架を下げたり、いろいろだよ、十字架は。十字架における贖いを感謝して、十字架を仰ぐという。パウロはものすごく十字架を言ってますよ。キリストの十字架でもって、羔となったキリストが我々の罪の贖いをしたという旧約聖書の事態を、十字架における羔キリストにおいてその罪の贖いというものをはっきり彼は受けとった。だから、

「いわゆる行為ではない。十字架を受けとれ。信仰というのはそうだ」

と。ところが、

2 我は汝等より唯この事を聞かんと欲す。汝らが御霊を受けしは律法の行為に由るか、聴きて信じたるに由るか。

御霊を受けたのは律法の行為、モーセの律法を行なったので聖霊が来たのか。そうではなかろう。この十字架の贖いを聞いて、それを受けとったから来たのではないかというんです。

「聴きて信じたるに由る」

という。こちら側の行為ではなかった。この自我に囚われている我執の人間はそれ自身が罪びと、罪なんだから、十字架はそいつをキリストが全部贖いとった。もはや、自己に囚われることからなくなった。自己から自由になったんだが、しかし、その自由に本当の力があるかと。その力を与えようと思って、キリストがこの聖霊をくださったのではないか。自己からの自由から、今度は何ごとに対しても積極的に行なえる愛への自由になる。

「聖霊を受けたのは、聴きて信じたところに聖霊が来たのではないか」

という。

3 汝らは斯くも愚かなるか、御霊によりて始まりしに、今肉によりて全うせらるるか。

「肉によりて」というのは、自己本位な行為によって全うされると思うか、冗談ではないぞ。また旧約に戻るなと。

4 斯程（かほど）まで多くの苦難を受けしことは徒然（いたづら）なるか、徒然にはあるまじ。5 然らば汝らに御霊を賜いて汝らの中に能力（ちから）ある業を行い給えるは、律法の行為に由るか、聴きて信ずるに由るか。」（ガラテヤ3・1～4）

と、パウロは繰り返し言っている。この5節が大事なんです。

「汝らに御霊を賜いて汝らの中に能力（ちから）ある業を行い給えるは」

と。御霊が来て、力ある業が出てきたろうと。それは本当にキリストの生命そのものであるところの聖霊を受けとったから。これは祈りですよ。「聴きて信じたる」というところには、祈りの事態がもちろん大事なんです。

さっき言いましたね。聖書を読むこと自身は聴くことであって、祈ることである。聖書の言葉は本願の祈りであると。本願の祈りだから、聖書を読みながら、もうそれ自身を祈りとしたらいい。マルチン・ルターなんかも詩篇を暗記しているようだね。彼の祈りは詩篇の祈りがどんどん出てきたそうだ。窓を開けて、大声でルターは祈ったそうだよ、２時間くらい。

あなた方は、毎日の生活で力あるわざが出てますか。何をしていても、そこに本当に聖霊の力が働いていますか。いちいち意識しなくてもいいよ。

「なにか知らんけれども、私は疲れませんね」

という。それでいいんだよ。目をつぶれば直ちに祈りの世界。電車の中であろうと、どこであろうと。雑音なんか聞こえたって一向差し支えない。

●十字架という門

ローマ書8章、

「[1]**この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定められることなし。**

「キリスト・イエスの中にいる者は」という。こういう、

「キリスト・イエスの中にある」

という言葉が何か形容的に聞こえてしまって困るよね、普通は。

「中にある」というのはどういうことですか。図で書けば、三重丸、三重の内接円。

「神さま・キリスト・私たちという一人びとり」

という三重の円です。一筆で書ける。これは一筆で書かなければダメ。これが「中にある」ということ。「神・キリスト・我」の三重の円。これが「中に」ということ。どこからその中に入ったんですか。十字架という門がここにある。そこから入って行った。

「我は門なり」

という。門構えに「十」（門の中に十）。こういう字はありませんよ。これは活字がない。私が製造した字です。十字架という門。ここを通っていく。即ち、十字架の贖いを通って、贖いによって中に入れる。贖いがなければ入れませんよ。我々は罪びとだから。贖われてしまっているんだから。これは完了しているんだ。

過去完了・現在完了・未来完了。完了的事態です。恵みというのはみんなこれは完了的事態なんです。完了的現在です。現在完了と言った方が一番いいかもしれない。完了現在と言ってもいい。だから、おそれなくキリストの中に入れる。平伏して入っていく。

現実の相対的人間小池がどうであろうと、そんなことは問題ではない。そんなことを問題にしなければならなかったら、十字架の必要はない。キリストは無条件に我々を入れ給う。何を考えているんだろうね、みんなは。無条件に入れるというのに。入ったような顔してない。入ってくださいよ、はやく。みんなこの部屋に無条件に入ってきたでしょ。無条件に入っているんです、みんな。これが絶対恩寵の世界。

だから、

「キリスト・イエスの中にある者」

というのは、十字架を通って中に入りました者。そうしたら、そこはもう聖霊の、キリストの気が溢れている世界です。

「憩いの汀（みぎわ）、緑の牧場（まきば）」

であります。もう罪に定められることはないんですよ、中に入ってしまっているんだから。

「お前の罪は全部、私が引き受けてしまったんだから、心配はいらないよ」

という。疑いと心配は禁物ですよ、信仰の世界は。

疑いと憂い。『ファウスト』下巻の方に「憂い」というのが出てくる。あれはダメだよ。「疑い」というのは心が二つに割れることが疑いです。

「へぇ～、そんなことがありますか」
と言って、聖書を一生懸命で疑っている。
「参りました！　こんなもの凄い現実には参りました！」
と言って、自分を投げ入れてごらん。これが入っている世界です。

2 **キリスト・イエスに在る生命（いのち）の御霊（みたま）の法（のり）は、なんじを罪と死との法より解放したればなり。**

生命の御霊の法。御霊は力があり、生命があり――もう何と言ってもいい――光がある。「罪と死と地獄とサタン」、この四位一体から私たちを勝たしめてしまった。
「南無キリスト！」
と称えれば、サタンは逃げていきますよ。なにも恐いことはない。キリストの中に帰入することだからね、「南無」というのは。入ることだから。
「よし、きた」
とキリストは入れてくださる、そういう気合は。
もう、そういうところから解き放して、本当に自由自在にしてくれた。9節、

9 **然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居る。**

「肉」というのは自己中心のことを「肉」という。自己中心ではなくして「霊」にいる。肉体のことではないですよ、この「肉」というのは。自己中心的ないわゆる文明文化。私は文明文化をなにも否定しているのではない。
どんなことをしていても、神中心なら、それは全部、「霊」なんです。
「汝らは肉に居らで霊にいるわけだ」
と。

キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。

キリスト者というのはキリストの御霊をいただいている者である。
冥想しながら聞いていましたか。そうすると、もうこの世界に入っているわけです。もう異言が来て困る。

●無即無限無量

そういうわけで、もうキリストと同じように子とされたから、15節、

15 **汝らは再び懼（おそれ）を懐（いだ）くために僕たる霊を受けしにあらず、子とせられたる者の霊を受けたり、**

聖霊を受けたから、もう恐いことはない。

之によりて我らはアバ父よと呼ぶなり。16 **御霊みずから我らの霊とともに我らが神の子たることを証す。**

もうこの聖霊のことがいっぱい書いてある。ローマ書8章というのは大変なところです。「御

霊」という言葉がいくつ出ているかわけがわからんですよ。26節、

26斯くのごとく御霊も我らの弱きを助けたもう。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みずから言い難き嘆きをもて執成し給う。

「御霊のキリスト」

と言おうが、

「キリストの御霊」

と言おうが、何と言おうがいいですよ。要するに、霊界のキリストは私たちに聖霊としてみんなに百％に自在に臨みたもう。使徒行伝の現実や福音書の現実というものをよく読んで、祈りの世界でその現実の中に入っていくことです。

人のために祈るならば、その人の悩み苦しみを担う祈りの世界。そこには力ある御霊の祈りが、相手が知ると知らざるにかかわらず作用している。物理法則よりか霊の法則は凄いから。それで、あなた方は

「不思議なことが起きるものだな」

ということを体験するようになります。やらなければダメですよ、本当に。

「自分にはそんな力はありません」

なんて。私にだってそんな力はないよ、自分に力があるというなら。私は無力だよ。無力であるからこそ、キリストが働きたもうんです。自分に力があると思ったら、自分の霊的な力なんて思ったら、へたするとサタンになってしまう。

だから、

「無即無限無量」

と言っているんです、無即無限無量と。本当ですよ、うそではないですよ。無即無限無量という。無限無量を持たないような無ではしょうがないよ、そんな無は。そんなものは虚無だ。虚無の無ではありませんよ、私が言っている無は。

31然れば此等の事につきて何をか言わん、神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや。

「もし」ではない。

「神が、キリストが私たちの味方であるから、誰が敵するか」

という。パウロが「もし味方ならば」なんていう言い方をしているけれども、そんなことに囚われることはない。

「神さまが、キリストが私たちの味方ですから、誰か敵することができますか」

と。天下無敵です。敵をも担いあげてしまう。まぁなんていうことになってしまったろうね、正直。そして、パウロは最後に絶叫しているでしょ。

「我等をキリストの愛より離れしむる者は、天上天下何があるか」

とそこにたたみかけて書いてある。

35我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、患難か、苦難か、迫害か、飢か、裸か、危険か、剣か。36録して『汝のために我らは、終日、殺されて屠らるべき羊の如きものと為られたり』とあるが如し。

これは詩篇44篇の言葉です。

37然れど凡てこれらの事の中にありても、我らを愛したもう者に頼り、

キリストによりて、

勝ち得て余りあり。38われ確く信ず、死も生命も、御使も、権威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、

権力者ですよ、

39高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。」（ロマ８・１～39）

と。キリストにこれほどまでパウロは愛されている。力ある愛ですよ。この力ある愛に愛されて、もう彼は言葉が言えないんです。最後はもう異言の叫び、霊言の叫びよりほかになくなってしまう。霊歌になる。

●聖霊のバプテスマを受けよ

使徒行伝に戻ります。ペテロがこのようにして滔々と演説しているでしょ。そうしたらば、それを聞いていて、彼らは本当に打たれてしまった。そして、そのあとで、37節から、

37人々これを聞きて心を刺され、ペテロと他の使徒たちに言う『兄弟たちよ、我ら何をなすべきか』38ペテロ答う『なんじら悔改めて、おのおの罪の赦しを得んためにイエス・キリストの名によりてバプテスマを受けよ、然らば聖霊の賜物を受けん。

聖霊という賜物を受けんと。

「キリストの名にあって聖霊のバプテスマを受けろ」

ということです。聖霊のバプテスマであって、水のバプテスマではない。「悔改めて」というのは、

「心の方向転換をして」

ということ。

「人を見るな、自分を見るな、キリストを見よ」

と。これが「悔改め」という言葉です。

「心をめぐらして、御霊のバプテスマを受けよ。心をめぐらして、まず十字架を見ろ。それから、十字架の下をくぐれ。そうしたらば、聖霊のバプテスマになるぞ」

と。十字架という門をくぐらなければダメですよ。それをしないで、ただ

「聖霊、聖霊」

なんて言ったって。本当の内実、実質において、十字架を本当に受けとれば、聖霊が来たらざるを得ないではないかと言いたい。ざるを得ない世界です。

さっきから言っている「気」の世界です。白隠和尚の気。それからまた、藤田東湖の

「天地正大の気」

という。天地正大の気も、さきほどの「気海丹田」のことも、それの本当の世界は聖霊の世界なんです。聖霊を受けとれば、天地正大の気も、気海丹田も全部、私たちは自在にその現実に、もっと凄い現実に入る。一流の仏教の坊さんたちは凄い。けれども、それのもうひとつ凄い世界はこのキリストなんです。

とにかく、プロテスタントは頭の宗教にずれてしまっている。ダメです、我々はそんな頭になんかにずれてしまったら。あなた方一人びとりは本当に責任と使命を持っているよ。しかしながら、その責任はキリストが負ってくださる無責任の責任というやつだ。棟方志功の言葉にあったでしょ、

「自分は自分の描いているものに責任を持たない。描かしめられているだけのはなしだ」

と言っている。さすがに棟方志功はその境地に入った。本ものの世界はみなそうです。

「自分が書いている」

なんて、まだ意識しているうちはダメなんだ。何でもそうです。

私はこの『芸術のたましい』の最初の論説を書いているときに、一晩でもないけれども、ほとんど一夜漬けみたいにして書いた。もう止むにやまれずして押し出されるようにして。あの詩だってそうだよ、あれは一晩で書いたんだよ〔「優子ちゃん」（１９７６年7月14日作）、小池辰雄著作集第2巻『芸術のたましい』天鐘詩集（二）〕。あとから少し修正はしたけれども。

とにかく、祈って、御霊に、キリストに飛び込んでください。そのためには、具体的に福音書のキリストをしっかり読んでいく。キリストにぶつかる。読むのではない。ドラマの中に自分を入れることです。これを地道にやってください。もういくら何万言費やしたってしょうがないんだよ、皆さんがやってくれなければ。

私なんか46歳くらいになってやっと気がついたようなバカモノだけれども。だから、私は遅まきだから、鈍器晩成というわけで、これから私は本当の仕事をしようと思っている。73歳から。何年かかるか知らんけれども。できたら、100を突破しようと思っている。わからないよ、それは。とにかく、聖霊が私の使命のある限り動かし給う。

あなた方一人びとりもそのようにして存在即使命として、御霊に動かされて、推進せしめられて、展開してやまず、どんな運命環境にも絶対に負けませんと。自分のいわゆる望みが消えていけばいくほど、いよいよ天来の望みがきます。まず始末のわるい人間になります。

「あの人は不幸だ」

なんて言われても、

「いや、私は幸いで仕方がありません。これを何ものと代えることができますか」

と。人をうらやむこともひとつも要らん。

「キリストの霊が宿れば何をか要せん。この火燃えたらんには、この泉湧きたらんには、何をか要せん」

と。渇かず消えずと。そういう人にならなかったら、福音を受けているとは言えないんです。

パウロは呻いている。たくさんこのキリストに接した者はいるけれども、結局、本当に受けとったのはペテロ、パウロ、ヨハネ、ヤコブ、たった４人だ。けれども、これが全世界を動かすようなことになった。皆さんもどうぞ、人頼みではないよ、一人びとりが本当にそのようにして――何をやっていてもいいんです――存在が本当にものを言うから。終ります。

●祈り

二千年前、ただ一人、聖霊に満ちて、あなたの御力を現し、御言を語り給うたところの主イエス・キリストさま。この福音書マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネに盛りきれないところのあなたの驚くべき実存が私たちを圧倒します。あなたは私たちどうにもならない者のために十字架にかかり、一切を贖いとり、霊体をもって顕れ、使徒たちを女たちを驚かし、

「お前たち、祈って待っていろ、やがて聖霊をくだす」

と、贖いのあとに聖霊をくだし、ペンテコステを招来せしめ、ここに本当に新しい歴史が始まりました。あなたの御国がそれから展開しはじめました。しかしながら、このキリスト教の歴史も惨憺たるものであります。

どうぞ、私たち、新しく目覚めた者が全世界のキリスト者の中に新しくペンテコステを起こし、そして、ここかしこから、私たちは原始のキリストに直結しなければいられないという叫びをあげて進ましめてください。

今日はまたその一環を承り、私たちこの武蔵野の一画にこのようにしてあなたが臨んでくださって感謝であります。どうぞ、終りにいたるまで、ここに東西南北から集まってきたところの兄弟姉妹たちを、またこれらの人たちをとおして、あなたが最善を聖名のゆえに展開してくださるように願い奉ります。

今、心からの、尽くしませんところの感謝と讃美と祈り、一同のそれと共にキリストの聖名により捧げ奉る。アーメン。